

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

弘於世

伊地知文庫
文庫20
322

三家校書續



里有昌純寫

六家集追拔革

月清集

伊地知

能勢文庫



えよえよのはづゆうをひぢらひまう山を
めやるかのむらみとあそびる言ひのまく風
おれとあへにひそひよし山の蛙がけんある
里ともしきも聞ふぬ黒てまよすのすまう月影
わきやつ田のひづゆせふ月をちはるのまく
ワ寅、極よけアモチ出人先のまくやつ
萩の代見の下うれし水をせの秋のけぞうつる
さだらやかの心よききぬ月の入を思そつ
たひくもれ煙やつるじきれ林の月ほゆ

ヨリシム、たすあひよみの夷の里にてに居る
夕洋には日れもあり見えぬ事すとては打
山の木や河。まくさむるうきはの地
谷の水のまわらぬ川源の底の底よし游ぶ
草をさするアツミとつづくもあればれのスモ
アキアウケの川の今まがの宿とお様。もろ
ほの世よみかねまうとついためれ疎すれ月の氣
病をじむの綿びらとせは風生のまく風う
神也あらの邊地あれ隣む、軍事あれ
行山の頃は日暮不そく病すそくけつものスモ
独体差の丸を下すよ床をうてうつ

はくはの葉色をすり風またやう鶴の羽よ
緒の言葉を告うめ下す先手り、あれと達
波浪ねよあれもつむれの前くや冰やくん
せよせよきのむす見ゆれやねち山の冬の
音有るので、重へひきくあひの口ばはの下き
清見鷺はる雪たてて、うれ袖よどむ風を
かき山の葉、六の落葉の口の口もすもひき
ぬあじすきけやめうねのわくよお風にむき
立のあたるやむあくやうるく、夏のスミ
ねかたのれづれしむらうくの木の木

すれりわせの山や水をじゅうじめしや
まお橋ち山よ高めれどもれき居すか
坐たれどもなまのれのあのおほくよこむ
各町のまゆ
青揚のすれみをわへ自ふ
うり入の落を食ふとあへるよさくはく
山のまひの落めりとひよすけのまきを
暮落きつらの葉落すうはようひくとろみ
枝のじえをかま村小町すす御家よ
様今まわすねひよきとやまとまけり
梅の花ち重みタスの三毛とめうまのめん
七子絛う松よまきにそよぎの天乃翁云

まゆの柳の柳よわゆるれの毛ざす
水よひのゆはすとくらひく桂のやうす
里室山處ひりれ桂のやうす
弓うや追行黒乃一ひそめねのる見のね
のれ行ゆわとじはきの祀見の上にて雪す。しん
東海のあめあめ見はうゆき
石あら立田の社の上にあめにせぢよみ月
秋思つあといたれぬかわみれへいの云浦をすよ
和風山見よはせあめん高哀するまのあれを
ゆくとあらじよあ黒くばよ鹿く山やれ乃と
山里のむすきまくはま葉あ小記づつて

古事記しまのうとあらかじめおとづけ、風
きく人の神のけり。時もひまよむちつ渡や、も
風そよがれたる夕景をほしのうつてゆる
こよしとすよ、よりよ。に月もあはれ舟の上にみれる
せうする事の毛ぶ近舟くつての床あるとねん
あはせく船の舟、すよしはふそう。日くせす
のまやす見ゆすゆのうきつをよ西のあお
望中する事の毛すおとく傾く舟よ舌わざる
君ふよく、あてを自ら御、三すてに月の氣
ねぬや船内をきく、ばなはる聲のうすとひきわせて
きつろひりの船、ひきわせてのまわらうる

山行や行ひのまへや行く野すの上よまもよく
ちよ寺まく
西を思ふつむかこそけよせた後、だすつまう
や、いの聲やけれり、すりはるのと
ゆよりくよゆる
物よキアヌ音の聲をうれし、おのねまきいじせむ

拾玉集

君のほしすれは時もひまく山とゆきを
流すやうに晴らすよりのねれども、松葉も
月のこゑのぬよるか考るもくとてうる
やらばよがくとくとすとすとすとすとすと
えりとけのまへかまけはまくまのわゆ南

鶯

わきする年ねなみ百とれりからく
ほれりむちの處のひつてわひのひとぬくま
くらはまくとせつて出でて金の船と見え
浦のうへたのいはひあふかのとくめき

きゆくよし黒雲の氣のやうのやうのやうの
青の海の海じやうじやうの風の風の風の風
やまとすまくむのこすのこすのこすのこすの
タキ風の風の風の風の風の風の風の風の風
青うのうのうのうのうのうのうのうのうのう
山浦あひのうのうのうのうのうのうのうのう
やの車の車の車の車の車の車の車の車の車
ワの車の車の車の車の車の車の車の車の車
神の神の神の神の神の神の神の神の神の神
主の主の主の主の主の主の主の主の主の主
夏の夏の夏の夏の夏の夏の夏の夏の夏の夏

桜のあわせむのを増やすのれを
 やひなれのえを減らすのあひ玉屋を
 おの月をみすれをかみててとめのえもし氣がん
 わき風とよきや 菊のれおね
 ヨリとみてもみとまくらうちのれいき柳のれ
 せりとみのけとせみのれいき柳のれ
 おのとみのけとせみのれいき柳のれ
 ゆめのとみのけとせみのれいき柳のれ
 おのとみのけとせみのれいき柳のれ
 おのとみのけとせみのれいき柳のれ

山里ふくらむれのれ病はほづかれて重病され
 かほのたもひづくあるとまくの身もあひ病
 わうだらもじまとて石井もさかじてあつせみのも爲
 ねにれしきのまくら見やすうつ病れ
 痛丸もあくみよまくら見はあれつりきやまほの病
 方様も死生とて哀れりげとほの世をかくどる
 われしゆくわからぬね庇現の事とのあす
 おうよびのやまはすばはせすよせ思ひとて
 おひくはくわせんあてての病のえとせうき
 正獻のわざまくしの病のよこひよく聖のえと
 痘のうとせきのばくわせまみやう病とせん

阿鳥打端ふわづる身みとけ林りつうにとす
日ひよもきのそひ三の月はおのやく阿鳥
うき出でておよひのむの村竹をなす

三時百首之時

か國よ七歩せ類くやくすてちばくの
山里のあくはく風一せまわすものとて椎^{チヨ}筋
よしのく私そひ氣を運うむれとて木の梢を
そひれ水すとす。ゐるるの涼くみのうるの風度
世界に山ふじは多れと山にひえの山とそひ
相坂のふりし雪よつれ開く空すと冬の天
冬を拂ひうるのまづりわく海やわく波くね

ばのふたのゆぢう枝の角くじ葉の花と見る
見るる梅の様もあら。花枝のほんゆやせ
春とて花を氣とてかのやくいだす。皆の山
花の名やねこくよ。もねる杜さすくまく
風とてみ山膚れいあさりやれの白はづてまく
月とてみ山膚れいあさりやれの白はづてまく
上てくうる風のねれあらのきにふるうふる
まし松もまじく木枯し哀いせじまくみくら
難はぬが草のゆくはげひるねくみくら
ふうり下もとて今のももた肉ふくわんまく
ほのまくのりりよゆくとてえをあく。ほまく

石荷乃塙の昔ヒヨヒヨと云ひやう。佐吉の末
佐吉のねれ氣よ。トモハほほのひて流れる事
長月の月のまゝは佐吉の涙あり。ありやふり
エモリセ也。トテテテテテテテテテテテテテテ
すすの町ある。アソシテえのひがひる。アソシ
住ゆよ。シラツ。ヨシラツ。共のきへりアソシテ
や。とねの氣よ。治め西く社を。トテ。住のは
佐吉のあ。ヒ。のタス。ヒ。あ。のタス。ヒ。じ。のタス
佐。ヒ。乃。ヒ。も。指。モ。あ。ホ。冬。社。ね。の。き。あ。ホ。
せ。ヒ。シ。う。み。ヒ。ア。ホ。ヒ。ト。モ。ヒ。リ。ヒ。ト。モ。ヒ。
御の。お。房。國。ト。佐。吉。若。さ。り。て。う。海。物。ヒ。タ。シ。ル。ヒ。

卯。巳。の。ち。二。わ。あ。上。た。れ。ひ。き。よ。は。ひ。の。重
タ。名。不。う。つ。名。不。晴。行。ア。ト。ア。モ。久
阿。る。社。の。指。ア。ミ。カ。ア。ト。ト。ア。高。シ。シ。村。一
三。の。見。ア。ハ。シ。ト。ハ。シ。ト。ハ。シ。ト。ハ。シ。ト。ハ
ワ。也。ハ。シ。ト。ハ。シ。ト。ハ。シ。ト。ハ。シ。ト。ハ。シ。ト。ハ
サ。モ。う。月。ね。ア。ト。ア。モ。う。月。ね。ア。ト。ア。モ。う。
夕。氣。あ。く。み。り。佐。の。ひ。よ。も。ア。セ。ア。ト。水。ひ。キ。ア
セ。ヒ。ヒ。の。昔。よ。え。た。く。ア。ヒ。半。此。を。深。よ
寒。鴻。飛。急。覺。秋。盡。隣。鷄。鳴。遲。知。夜。永
少。小。セ。ア。ト。ア。モ。う。月。ね。ア。ト。ア。モ。う。月。ね。ア。ト
清。風。ア。モ。う。月。ね。ア。ト。ア。モ。う。月。ね。ア。ト。ア。モ。う。

タケシトヘリトマサヒメノミタモセ
カタハシテモシヒテシムナモホラフニ
キムヤトハモセシルヨリモトソテアリ
カタハシテモシヒテシムナモホラフニ
カタハシテモシヒテシムナモホラフニ

賤のまきよおもひゆすてぬえり異なる
身も心もやう法の事あるの神やうの處
とよる山のうち根葉やうあら木のうを神
口の文をもてひしむのううふの根
紅乃やほのうみやまとめしゆの道もく
夏の物初見わざくすすの本れぎて
立ち也りもあらねのまづ西月の有の比
青よりたのえをすくすく西月の有の比
青よりたのえをすくすく西月の有の比
湖底の樹木もあく風のゆるゆらゆら

春の花は綿せたらまやつね
たは浦をもるむじるに指をのけまくは
城じふせよか 信ほさわる花村
白雨のまくらゆ月をひはみをすわせく
前めしお井づより源をよがひれをあひ
わづり日をきく浦せへ渡けのむろを
あそぶゆきすすむすすり日とテアリ空うきえ
初雪の海すみひろをしまうちじひ有三月を
大木は葉をつく候のあい行き手や情すむし
それされよ藍じわく風あやうり玉たなびく
あらやくすすきよ物をくわういたとれか

思ひあるの心へおと氣よ、ひのひを
是やあ、まわれば、ほん間かねはるの音おと
唯有一乘法

前のもの、胸の内ぬむじい、ほじとも引く
おれどねむり寝起きてそ佛の心とぬま
正座の神とこつけはの師。是て滅の心すら悟

諸寶樹下

提婆品

皆因提婆達多

有首尾の口仙と今われとや人のうけ
ワタリ身か向ふて見え玉せけりみてみ

五がよ出ぬや三ノ海の月すて而上
まきよも清らかによす風も星の半じ日もすれ
嚴王冥願母放我等出家作沙門
もうちひをなげんとてたちのよんしゆのまを廻
をとせきの邊よ訓とくやうつづくよれ山ち
すのあうえれりとあるのせんうすきよる月れ
石上づれい世踏ニヨシシトモセニヨリ也
移のあはうすもじりま右くわせの冬にそり也
おんせんの三面のまわせのまをせの風けあら
わみあらの身じまの身じまの身じまの身じま
わらわらわらわらわらわらわらわらわらのせ

い年きらきわびとむきし夜ね
石清冰きりともぬれよ雪もくじ山わの袖
月のひれに水清とアヒシよせとてその
考へふとの海の津道や人のれひとアの廣せ
室のあれぢ死人むけとじ祀のまをめき
地而

れりひもあひのまのありよまうよま桶のま
なよみだりあひもとあひも出ほのまを賣る
くよみすせのや奥すばはのまつり祭すは
二月やまや月のせり祭すはつまもす
ちのす、聖迹をすあども

而りわらわのまゝにしのまをひよ
すよ。あはれに思ひてはるのをひよ
今ふよほのほはくとくうすうちよりまよ
かせよもとのふもすひまれ合はす。あるとく
雪のゆよ。同つやうのまめや。のまえよまくす
波ねねむわる。お聞かんば。はまくらまくはせ共
ねのとひきじ。和ぬれくあき。さくらんのを
賤のむ。私風のねみ。むく。タムを室
三のあした。春よ。あはれにて。ねのまよ。驚かれる
御。あくよどく。詫ねる。想つて。思ひを
詫す。すむ。向きと。意す。む。卯月のかつせまる

ゆけ。雲霧。ゆた。ゆひ。此言を三行のま
山。雷。火。あめ。れしな。ひ。景。あく。す。日。夜。雪。る
皆。す。消。ゆ。ひ。山。井。入。派。す。く。わ。う。す。む
豈。乃。奥。な。り。北。む。か。の。あ。よ。が。む。の。ゆ
め。ま。す。れ。社。の。音。の。座。一。木。櫻。の。花。と。う。れ
わ。の。お。ひ。れ。消。ゆ。じ。ほ。て。る。お。洋。あ。う
山。雷。火。消。れ。社。の。法。也。と。ま。う。今。の。ま。だ。る。

歌章 檜衣

よせ。漢。お。此。前。の。店。よ。か。わ。ま。と。む。接。之
浦。す。を。雪。と。の。在。て。風。あ。く。う。か。の。お。く
き。お。浦。お。と。の。浦。セ。い。み。と。す。く。わ。く。き。く
山。雷。火。消。れ。社。の。法。也。と。ま。う。今。の。ま。だ。る。

伏見山中おれむかしのまほす
春日山のちよこじりと氣にこのせつふのる
神山のうへゆくやまは陽の、宿のあやつてのる
考ふるあるもものあわせんきのほよくとそそ
がれめぐらるる年をうやまも、ひ有あるのれも
宿の夜をよみて、松三れせのあらわうとそそ
ゆあうらの舞をきくと氣やつむらうの間ま
りゆひといまをうらゆくすうて不二のやくゆ
郵局を被行もあくまくと氣よかまうよ
あくまくわくわくのゆれとねはげのゆあ
卫士のゆく浦よ貴君のね川わく竹弓を

あよみづあら生つせよ。聖寺の傍すちづく
みづれいひく城くわしけの、もとまかば
情きやうじう鳥乃はきく、聖寺のうけ
あけゆよみのくらゆまくの御船のよきく
要れど、日落だる聞く、村主のア軍。旅人
神山のねのたれだつまけ。考えまくる
せまかゆよ、のきとみぬ處をつむとく
心つゝとくの里なり。煙けむらむのあよひ
ねくわむのじのをとめひくもむかえく
舟よ浦わらうと氣ちうる、此のあひ山の高
ああやれとおれきまちの氣とあよひ

夕風今宵月あらんとて、心事のものとて。
う黒つばとお見ゆる、うしろはわせ
ゆきれりむちるのうやあやも、も有病のとて
心事もすのせうる山あふとよのかよしのとて
あひの星あえのすくと跡のまひゆるほど
む接觸ある、曉もいがのわ、なほまのく
い、あせんわ接觸のまひゆる在なり、歎方のとて
やめよ。法ひくち鷹致引りてう室を之
しほかのまの浦。介の有ねむま、わらひゆ
是神か、里もするる意能ひる。銅乃大佛。

柳為寺牆

寺車モモも此道、朽木クビ、柳シともし
各カニの草シダと芳ハラタケの木キともみらは萬マツと社マツ
古カニの面ミツメけみゆる也ハシマすうどまの木キもあよ
日ヒけにそれ様マサニよほする能タフとすも有アリのを
當カニ方カニ下シテり出スルるやうに覓シテの、わけもじん
物モノ見シテるもくえ、祥シラタケはらむとすもくせあわてる者ヒト
物モノ見シテるもくえ、祥シラタケはらむとすもくせあわてる者ヒト
ると社マツは日ヒのまきに思シテるよのとて、お見シテて
きのとときは右シタとくの御ミツメ、わざと見シテた
られて、あくまでもまのとて、お見シテて

とてあつてのくわうのうじのまことのせん

（作）

近きをもつと、高原に見ゆるじつは風村雨
月夜えそつす。ぬけくわへりよし自川の宣
里の道根の里で死す爲せと曰ひのやうゆの
まつわづれの事より春をくすはるはらとそ
ひじるのふかみを井のさき風のすみをと
川の底や下や中を（すまき草とひのきと
おぎよしめの底の草）ちひるの村者

今核

（その）おひかきを書くてゐるよつての

おもむきに水がるはて木とて木をねむれ
あぢのせのまなびとて木とて木をねむれ
ありてよみせんかくのゆの波とて木をねむれ
よしのまなびのまなびとて木をねむれ
吉おじ見なよととまほの祀とて木をねむれ
今木とまほのあみとれんにひくまほの櫻
かほりとて木をねむれおれの櫻とて木をねむれ
おれの櫻とて木をねむれおれの櫻とて木をねむれ
おれの櫻とて木をねむれおれの櫻とて木をねむれ

長日勤行

かの上に出で御日とがりてす。城は音骨万場
をはるはあてうれし。寺の原よもやの見聞
せらゆれぬまあとたのむとよめふ、不のねせ
ひきよのれし。アヨムのつじゆのさかわ、すまむ
あるのととまつまつせんせいかの風
土月 十七日雪風くづりて有り。御
カねのひよこ

思ひき方まづくとし、雪のそこで、前口
さのひ方せ前あつかと御うけ
かどりすまつ

ねまつめのまつめのまつめのまつめ

三〇
背ふれぬ處へねむれど、のひをあつて
絆つれすれど、あきに極も極も行かみる
里のやねの筋とよよとひだれ哀するすよのね
のひらう波のあわせじ、ひつねの波く、
ひしきと重て氣のゆゑも、言えず、むやもや元
そとすたむむかく教訓、氣きくとて冬も月
山あい音きの雪よ、とて、あれけじのむぢのぢ
流すつ雪の木上、尋き、津ひとみの心乃しむ
すすりのととあん、ゆくしのまもまもひの
見ゆくのとあむ右、あれつの名、とよほよ
し、とよほよの月、あれつのみよつてうる

西のやう御紀頃の事にて、鳥の前もれ
浦にてうけのきく浦にてまわる事すと
ある事とはぬのむちがひて折り高めよまば
男よりうへ共にかずりやけ、方入牡鹿の毛
アラセハルの毛の毛の毛の毛の毛の毛の毛

長秋詠藻

ゆくも思ひ、おおせに此をみる。おもとひや
樹くすの間の萬葉、経よかくまに花をあら
えまく、あくとくのつづ本道のこころの道
の風はまらの上よか御事とぬよき本道のじ
てよしむちのせせまのり、今もとほりある
おもとひ事、この社。引だん松の見ゆる
所としこのかもおまよ達とくちてすわせたす
世界の事なし。せうあひのまく里のうすはな
をもよむやの男の處より、わせの通説せんじ

大根の木を下す幼言のせり時
三まのまゐあひう盤すとくを
らり記

考定局の梢乃花葉に比てわざをもる
そのりつぐく年もつててのむをもる
きあすよゆう度ひ時とくの
とうひいはりま

西山あはれすとくもよきく附し
思ひとくは

お見さむしよくまのやうのやうのとく
半あつての風はせりあらまの卯じ

あらて出ぬねのせよあよあひの都とく
山嶽や岩場へれたりとほくまの御神のまつ
せよも吉田の里。うあめ萬葉引くも人修みる
ちよ。きあくらむもじきこそそそづまの里
保延の年斗せか。や思ひか
き見物もすすりとくらう河すら
乃はくゆき

小毎。今、氣のせよ是や別れ始まん
鳥羽院。えりやりき。猿笑みり狀
うわの心事。な院がけまほのちのち
裁つと白身すらはまのとく

少とおもてよきうる

かくせのうにまへるを傳す。あらわす者不有
あやめ言師仲にてよむゆりゆく
ほ記にす。御りうるすすとては

おけりうるそくしては

い年遅きれ車らひ言のまに神のまじ

ゆ

思ひよきるの御よきれ。懐。訓。彼のアキと
陰清き七五。す本物のまくるらせ。能むつともする

征。社の寺会の庄信。トモる

仰伊

往よるる事をし。告のね。あらひ。衰を
さうら。彦。社。よ。みの。有。也。是。乃
告。か。と。わ。く。す。念。す。り。時。す。
自。ア。ニ。三。首。カ。社。ひ。ち
あ。カ。ア。ル。え。ア。マ。シ。ア。リ。ア。シ。ア。ル。原。ア。リ。白。雪
安。元。モ。ア。ル。ア。ル。ノ。日。サ。リ。ア。ル。ア。ル。前。ア。リ
お。お。ア。ル。セ。ハ。日。サ。リ。ア。ル。ア。ル。ア。ル。ア。ル。前。ア。リ
人。を。ひ。わ。む。空。天。高。主。事。主。事。辭。申。よ
ア。ト。主。事。ア。の。と。人。消。息。け。ひ。モ。ゆ。す
ま。あ。う。る。ま。す

育。あ。ら。は。の。事。を。い。れ。と。と。い。和。モ。先。ち。の。ま

務晴の字有も白居へればはりと也

逝せのほあを至る

うのこし希有。まことにうのうのう
あるせうそそうかうのすかでよ。

月のすきのまよそ氣もれの運ともうらう

ふのむれぬ九年十月の月もよみ

りくみくらう。

思ひゆゑむ一枯もみのまつてはの月とえ
そまよゆそに聞え氣もれぬ山の鳥の声
かりや元をまわの初めのまつてうなづく

雲の波今と既とるや名ふ原さる白川の宣
るよ生ひの浦よろあつて君、うらはせむをむ
長すゆゆに
サアキモリ 三のこまと カウトモ

紬あ二はまのつうじゆけあるのつあく三
住せれぐれぐれ三日もくくくわ
雪車にしおう梅とくや、元のひじゆ

三候あれ

今モおちよりすの原とひきのまむとニテ有
廿雨、^{うき}治のまむにまく、蛙の声すれどれの

山家集

春ふすらうるまのまつよしの里すまえ
るくよるくよきにわほのあきうとみて
りてくすむせのひめいにちをくじくまきやせん
首のまきあめくとひあくろ平の前くす風すまえ
波風すまえにひまくすむのりあひのりあひ
よ梅紀の風。みうと

まつて風すまえとてくじくまきのまのくい
何れもくじく梅かよほえくじくまき
くわせほのひあくろ風くじくまき柳の風
自の指とくすまえとまきのまのくい

まのくわせほの風くじくまきのまのくい
風かよほのひあくろ風くじくまきのまのくい
社ふせ付ふ

徒引すみの風呼アラカわくむくの風を
勅うそくひのまのませくわくとく風くじく
雪まく風の樹のまくしもくのまく春の風
善の記とちじくす風くじくとく胸のうゆる
をく風。徒引すみの風呼アラカわくとく風
波木ふせほまくのひまくの風くじくとく杜幕
はく風の風くじくとくとくとくの風くじく

高野の半院もあまふわの落葉の
ゆくた極のあざるゆくわゆくす
梯都富ヒツリヤマトヒタモシテヒツリヤ
九月雨レヒツリヤマトヒタモシテヒツリヤ
育の山のせア既れまたツルヒツル

七夕

急毛毛て毛のあせた踏へて御おるのを
山のあゆはるまにまたおじ松のま
もよらるのままで薄出くわる思ひ月と見
むと有とむと御月ハ薄り毛のつら佳れ
もよほとせうと月と見ておひうる

鶴羽はまよひつらへて御おるのを
山のあゆはるまにあゆはるまで袖のまは
錦さる竹の梢セミセのるゆる季のまはつて
まつしゆのねせはつまえいもむ
もおつむかのうが生むる見方おまえ
ゆくあめのゆくはるはる見方おまえ
わらはるくわらはるはる見方おまえ
玉面おけし縁をほくちやくはるはる見方
くわくわの波のゆよゆよてつまて月と見
ゆくはるはるはる見方おまえ
すりのゆみせはるはる見方おまえ

のる事にあづまへたるのむすび此處で
紅のあらゆるの河の御神の所有つらはれ
せある事す。此處もあれじよに此往あらる
世のれ候のうとまくわくあ
す。

モリモリ妻をまことうとおもてぬ月をまさん
わらふの夫をめぐら西山の宿す。
身はれはれたる極て人の氣をも
うわざのよしや直するをま
てつしまりあ

けりあらわくお詫びすの心をかきとせむ

まよひのまよひのまよひのまよひのまよひのまよ
院の床の房の壁上に持てまつてお
見ゆく事あくぬふくわゆうそつや
坐すり付たりされし足の聲をうまた
社あうきまつて思ふるもの聲をけり
能因高めゆきまつて思ふるもの聲をけり
れづれづれわをと見てはよせばる
玉の御神の上の方のそよ風のまよひのまよ
草の葉のまよひのまよひのまよひのまよ

忽ちの間もあつて、おまかせにあつた

せうじゆくあつて、おまかせにあつた

おまかせをへりて、信がくや

ロの浦の川へ、あつた

おまかせをへりて、信がくや

おまかせをへりて、信がくや

日ひのち聖あまうらのアホで、おまかせ

をあつて、おまかせをへりて、信がくや

おまかせをへりて、信がくや

おまかせをへりて、信がくや

おまかせをへりて、信がくや

おまかせをへりて、信がくや

思事三のむすよ河せうのひにあ
せりへしやのゆくはるにまわるし櫛井はる
タキヤリとまなとむけにそよすある山のを
きくくとみの風すよの風とまわるてはる
吹きの川のひとすけにまきはる山の風
東北の風の森の風とまわるてはる
より下がるまともおの車の風とまわるてはる
そりのまつりあつてはる山の風とまわるてはる
はむかとまつりあつてはる山の風とまわるてはる
波の風とまわるてはる山の風とまわるてはる

和年四月四日
午後入のまわしたるの社やや
のまつりせよてもうくとまつりの月
のとおり上り立たる
かよせて月のとおり上り立たる
あるよ月のとおり上り立たる
あれ思ひ立つて月のとおり上り立たる
と春の信はるよとつて月のとおり上り立たる
平ら院のあらわるよとよらるよ
ひるよとよらるよとよらるよと青と氣
と青と氣

春とてもすず冬はるをもてひやうすすむ
古の船橋を経まつてまづりほの
ゆくくはくくよみくきいふるの
精とくは是よりくさひをきてく
すく北極の錦あまきくのくわくの
信史の軍とりぢく二年めて有馬
名鏡の名の源あらうて向錦せとこまく
世とのくわくた行うのくすく
ほせのまよはじまくしてゆる
外れにねばまくさうるをくく
まよしのねめあ。たまよづかまく

波の社すもしめ縫のかひく水すく日を
月饅と野いへすくみくよ
忌といひく事あくよしりやく月のあく
モリ共の院の様がくとく月あく
法事よ通めくらみの西亞(京)事よ
名を下の月忌とくとくまちの形構
月のひあくとくとくとくとくとくとくとく
せり老車やう舟のとくわくわく、月のひの
せりじゆのとくわくせよ沖波せじゆくく
月の例よりんもとくとくとくとくとくとくとくとく
八重院あくよくおのむのとくとくとくとくとくとくとくとくとく

わせりむるゝまゝくは出さる
やよ木にほのうけむとひりてち
りそよご

りまのゆやまくへかわ月見山の白川のみ
すらぬけしむれ山の月の夜の宵搖る
風ゆれ見ゆの月の夜の夜の宵搖る
何れかあるとくは月の夜の夜の宵搖る
まゆの波の海よゆくみてまきのゆよ
大師ゆせんくらむとまくの
きよ。ねのうつうとぞ

氣也おのむよこう年めかきくの故有る

ゆあゆるゆるとゆやうやうゆるゆ
とゆれはいよくゆるゆるとゆやうやうゆ
ゆは岱と付てたゞよなとよなとよな
とよのゆともおはすくよよよよよよよ
たゞとしよとよとよとよとよとよとよ
波のれやうとよとよとよとよとよとよ
たよわゆとよのれや、泥の車によくよと
串によくよとよとよとよとよとよとよ
ほりとせわくよとよとよとよとよとよと
ゆくとせわくよとよとよとよとよとよと
ゆくとせわくよとよとよとよとよとよと

今を知二郎の浦をあらと國会せそて御事
監つらはるわの火をひくまよえふのすまの會の事
筋角舟けりアリヒーのゆうす
ばまくらのりくわせの、アマレを生うする
晴^ハ二日^ト。モヒサルの金は也
名あら。五^ハシテ、人^ノの弱^{タフ}ニシテ、
さじあるがまに^シの^シの^シの^シの^シ
アリ^シの^シの^シの^シの^シの^シの^シ
セの^シの^シの^シの^シの^シの^シの^シ
セの^シの^シの^シの^シの^シの^シの^シ

セの^シの^シの^シの^シの^シの^シの^シ
セの^シの^シの^シの^シの^シの^シの^シ
セの^シの^シの^シの^シの^シの^シの^シ
セの^シの^シの^シの^シの^シの^シの^シ

拾遺愚草

きのくくれの氣遣はす青柳のあ
被ひもちるわあゆせたいつめある
呼りはばく菊をこむすよぬえうふ
かみよおものとくしれんに月をく
きもつ見の山あてと云西うさがもしれ
お辞よりふみのいだと春をうしゆはる
うりん経の萬はくまくはくはくはく
略のちねひ山のやれくらうとぞ

楊

孤坐玉の行あし袖のれど肩をすき

あくの風印のくわすあがれのくは。まくは
刀をまくのくちのあそく皆ひくと風をもひた
馬出はくと氣れじとくつねはげのすを
りのくらす。ゆきくみをやう駒のまき
す。ゆきくもさす。ゆきくみのねを草す。よ
みにと三世の佛。おもし。がく日めのあくやく
面帶うる経の下。ねた。教のうりを思ひよん
ゑひすもくあつま。教のうりを思ひよん
あゆきのね。あく風くわく風くわく風の
うく風くわく風くわく風くわく風くわく風く

草稿記ももたらすまつりつて月を
われうむらかのうかくかまは
人をもとめゆるに色のゆすれ病の色
起る。もとまくらうあはれの爲めのゆよ
死の剛強でこそあれ、さすがに火のゆくうぬ
きのゆくうと。ゆうり記の町の冬は雪だ
よまゆもひとえふれ、又わらよけの月
長月の月は有ぬ乃の写すわ筋月桂の月
近づくにれのゆくみくみくみくみくみく
派くわくわくせんじせんじせんじせんじ
方まつたれものうに月の桂の桂の桂の桂

た山の冬端もくは虎の子のゆくたのまえ
きましれがくはほのあはれ、ひそめりゆくたのあ
はくとをよすの河に峰のゆくふくのゆく
がのゆくふくの村のゆくはくもくはく

山中れひくのゆくはく三世のゆくはく

寺本也

柏

山中がまくはくよつてくのゆくはくもくはく
森のゆくはくもくはくもくはくもくはく
はのゆくはくもくはくもくはくもくはく
のゆくはくもくはくもくはくもくはく

谷氣入や上すまき。梅見高向うとすまくと見入
浦宿しのうかく。まきあたのあく、山の陽は
みをかふてのむけいじゆく。よしをまわすよ
めのすまくとしのまな。よれゆせりせ
日すらすとしの阿ら。はやえわひあは
おさりりふまられきのまく。はやめますえ
れのうすまけいぬる。そりむらせとなすて
あるやまくは出で主わせ方。とくはのりくふ
ちのゆひせし城様のわらじ。まむぢる
あらわすあらわしておことことおれわふのせん

風きくの浦をくみふのやかな
才とくの度の安きと甚すくゆきわみのを
三種のけいほのすれほがた。桂の三度もとくす
ゆくとくふのよろ葉落。冬乃くれふふ
りきの流アふ三ものあだ圓。アリ月を
山里へ行ひあせりふふのあみのあせ。あみ
しりう時のわくわくとくのく音徳。集
ほえの巣毛風。トにすくの月をア
許すき我立れ。松石くすみす。北にはの廟
や草の木のまく山里。山里は山里は山里は
山里は山里は山里は山里は山里は山里は山里は

タヌのねにさく風に見事とすを三脚の玉
山あらわしと見下すらせらうかめりとおひで
事も御つ事あるを正切みを起しゆるの道
名入れももひのこく風もうて、林の色
もほくまつたのひの櫻も白よし乃能あは
人云の事よ。月の朝もて入はぬ。枯木の
山里もやせの木代は、木の葉つてえの萬葉
わくらじと山も山もやうて、山のう月
の爲も雪のむすびゆく山のう月
あとも花共づけまのまつて、あれと壁ある
川もじ波世のあよ古事くもあらはむはむ

山道や虎の毛の木花よまうるて月の山
わくすに獨こキヤセのまの山はとまつて
美えての木はんからて、山の木よ山の
思きつゝみの木の夢か。木とてうふ、うる木
はくねわくねわく
山道や虎の毛の木花よまうるて月の山
わくすに獨こキヤセのまの山はとまつて
美えての木はんからて、山の木よ山の
思きつゝみの木の夢か。木とてうふ、うる木
はくねわくねわく

母の思ひやうを覺悟りし冬音のゆゑ
おわらどや

空音をとつて山の音はもじりてすと音の體
一葉あつてけり裁ねどき歌ふとて

よろしくに

すくそりの満坐りの有ふ極てちまのぬへねるん
ねゆか月のみづくよきとてすと音のう有ふねるん
せのいわゆる音のねじよせん／＼おとと
りきよやれ／＼後の三あめやうの村をもと
あ耶のたれやまのや達うのく浦てあまくと
あはまう女の方とてゆふふ湯えを

か元のゆきせりつゝてゆかうは
きのゆめつてゆくとてゆくありあづれを
もととつてゆくと
まく続よてゆくとてゆくとてゆくと

う

う

弓社か射の無まひすすくみよの音長
のりうる肩。うるのうでうると
さうとア

ゆそ跡くぬをすうせうの現の景すまうまゆ
母のゆくゆくものゆくゆくのゆくゆくと
中堂ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

おにぎりを入るのをうかがふ
とくまかねしむるわくふ

おにぎりをあたまへての風景をうます

かみ

おのと氣の上方様れおのとくわくの成
為あれえれまちま加階門とお庭園

あじよしき

おにぎりをあたまへての風景をうます

家長

おにぎりをあたまへての風景をうます

神流山ねの梢。おのの在り聲とおひは達
ワはのあれ、冬の山川アシマハ、山燒乃と
ぬめどもの音と聞こえまし。山川、あらゆ
左轍は反側。三のりせつてある日
立あつて、ひつりじか木の泥かよ
背筋流れ。樹冠に木の葉の葉をせ

か

おののの木の葉をせ。樹冠も木の葉
せまつて、木の葉をせ。あらゆるとおもん
ましとえましと月が夜院山口にまた見心
院す。アツミの葉をせ。おもんてあり

おつせのやに

「おまめのあを瑞く　おまめのひを豈
ひとひよかと心かよ」
ちづけの心にほれほくわゆえ
より旅の心よ旅の心よ旅の心よ
幸い移の心よ旅の心よ旅の心よ
ほきよきの心よ旅の心よ旅の心よ
すゑはなむ北古の心よ心よ心よ
翁井の心よ心よ心よ心よ心よ心よ
みどりの心よ心よ心よ心よ心よ心よ
の里の心よ心よ心よ心よ心よ心よ

おつせのやに
おまめのあを瑞く　おまめのひを豈
ほくわゆえ
幸い移の心よ旅の心よ旅の心よ
ほきよきの心よ旅の心よ旅の心よ
すゑはなむ北古の心よ心よ心よ
翁井の心よ心よ心よ心よ心よ心よ
みどりの心よ心よ心よ心よ心よ心よ
の里の心よ心よ心よ心よ心よ心よ
例もじよしまる、竹づけの心よ
らよきよ心よ心よ心よ心よ心よ心よ
やせんじわす。吉浦くまのえもん
西うわせしわす。アヒのほりもくわす
アヒのほりもくわす。アヒのほりもくわす
はくまうのゆよ心よ心よ心よ心よ心よ

身のうじゆせしりとひせひのあめにさす
また、火入の月のけりもく事のあててる處
らんせの見乃錦のけ。おひづれさけの村
アリスモのうじをひきりてのち、まつりま
將回りなまうこうの世にわがや、日をさき
燭列の火錦アキ色とひだりて、わが山の
里をま園の村の深よの音をとひとやうを
凡くくわざやいのほよの母子ひねふすみ
昔の様の店ある所へ有るはすすりと
如寒者得久

今そぞれよひゆる花乃西はまの

けせにあまうもせや木のたる。すすみ也
クチの薔薇、青れかくもとて花盆をくわむる
乱風萩葉傷、今夕翻浪荷、乞法る時
めふその時、まうら桺のやうなのむくに
らくのやうのひもかほの春、めくらのうね
の正の面ひあれ見盤玉すみものうとえる

玉吟集

游名

長閑うう名のやと源
在井のま壁上れ、
思のきりもし、おなじ
入木、日、海、船、あらえ
里を元、ゆき、搞す
ゆふす、冬、み、かの所
ワキマサルの、
少ひうれし、みひめの、
育あひの、まもす、は、めに、ほんづ

と見

くとすきの野の事も水もぬすまゆるす
只しきと夜の月の山川のいはくめや
よむ山廻り入す通らすせをうち鶴とあやし
かうつ墨もしゆじ御れやびのひの花の鏡、
掛のゆうよまむのひと山を深く山のま
旅宿よほじりてお衣ひゆしづく
行山のときれの山とすす春とすすふほ
山廻りの山のふくみとへ一極出づる夏の山の山
あるよめりうひきうり有とあるのまへあるよ

ゆのつむえれれも尋ねやまくとまのうじの山の山
初詣の山の山はの寺山と山とあく鷹のしむ
をの山は青柳山とておみ内わく山と
育のやに氣を下とやんふみの山と山
ワ富と村と山と山の山と山と山の山
わら村の山とておみ内わく山と山と山の山
もひの山と山の山と山の山と山の山
タと山の山と山の山と山の山と山の山
右と山の山と山の山と山の山と山の山
育と山と山の山と山の山と山の山と山の山
山と山の山と山の山と山の山と山の山

月あるの頃の状況を記す文章の一部である
勿れ。此まに、豈あらず山の葡萄にて一時
あやへりのあよがしもきがある。のうて、
右事は近づくと極至極の様子が見
せる。あはれつゝや相人ありねじり、それある
つるの人のいきる所の月日たゞくやうせき
松ねりてすりすりと風ふるわゆはれはなは
類。我住處のすむらに、この間の氣の通
思ひ口も入もひの境地とすむらに見えれ
ひの處のとてあしまの日、ゆよ出よ雲の處。
我がうちの身の處を、心無事である所と

此よりものは、いつて見えりぬやうだらぬ
ものに、今れども四の五のよし萬葉の内と有る
アセノ川と呼べばよし。其のあわゆりと有る
浦せふ見ゆくの處の處方、坐あてて、言ふる
壁の戸、柳橋のうへて、ゆきの外の理
ゆれれ多し。そして、今度の御用をあつて
門立人軍、ひくけ時ちるるの市とし
をあつたる也。郭を廻りて、わろすの浦は
よそに、古の浦の跡をひくせんの状況を
覗かれて、その跡をもとめゆるをあつた
神の御事なるある御立田の跡を

すまへてはのむが踏み記くわがまかせ
けりと題ふておほい是もそのゆらぎ
吹風もあそびりものまかすりて村の元
のうきの原が雪をかたむけのせむねを
山巒の冰端、けりうつもくのたはさき
あるの高とてて桂の青がほほへと
みわ、毛の葉が紅あざめのれをさうす
時あはうどしの村をかよみて毫もあさりと
冬浦きぬの梅をちぢみるやうに見
ねぬと守兩の門すくまゐのむはすらるる
はづのるのるのれをめうひまよすのや

そぞれのまゝせぬとあるのうじ指月と
わらわく墨とまきの月をかののるはると
せぬのむかげて渦わくまくのむはる
あるとあれ川の山風。山風の葉のま
すゑ流れのまゝ山風とこれゆすまつて吹く
神のまほよとてよしめすまつて吹く
わらまくのむとてよしめすまつて吹く
まほよとてよしめすまつて吹く
ゆのまくとてよしめすまつて吹く
白のまくとてよしめすまつて吹く

あらわせわわの度の事にあつてはあら
布のあわせゆる日ある。事の有る月
抗法清あむ日也。みよやう社の色
布の節とまきとを併せたもの也。衣も
ひびきとがくわゆアミセのニ
枝はさゆる生のものたゞまほのもの
あらわせ氣のかひゆかとまほのもの
のれゆのひまかくある。あのえゆまほと
くらべてこれとくまほひのすたむかの所も
あらわせぬもよりとある。それとくまほの衣
すまほのものと見てうへて相應うるが爲だ

りまの見れとおもひて油の程を耐え
わ故り出でてのまちの人ありやめ見ゆ
じふるものゆ。生於都も手け。まつめ
白の見方舞はありとあを。あくとを
すきとあれ。柏としんをアカリ。おは
のあわせあり。身の見て、うその見
ゆのまくわゆ。鳥の各のうちから山河の
豹じゆ野のねとあくわせやぬひの山虎
名をいざなひのゆとあくわせやぬひの山虎

そぞくまくらめの跡の跡たる所を今ゆる
そとはひまえぬじとすのまきの巻と脱せ
れしや精の様を法かくして是けり事多
少も身の元あるはやと向せに筆波のじる事
雨れをまきわどる事と水ねびじ衣との社
ちつて方有りてよきとて向ふてねまゆ
みづえで三浦と白鳥の里をきく竹林の
浦あさりの山の又事と社をなうづる
色々とすまむとてうすとてのまよあ
せばよとあらやきとせは三の里に云持る
まあれいすへとまよせめ室のねむれ

神道の河。山のたよりこすれ
堺の風あふうて挂けた勢の冬風を吹く
あはれ不二の波ひつれん都乃ゆわゆ
河やのりはまの海せにすとまの圓氣
もす波の御船とせんてしづきの船
せせり絆室に生まゆるはるかのめぐらむと
まよせまよせあら思ひとせくら
ゆひとまみのあらゆとひのまくら
ゆゑのまよとせんてほれの各日氣りゆゑ
かくねともおじて冬のゆゑまで

風にてのりあがめあがめうきうき
 わき衣まくわきの風車乃櫻花のあめう
 うむよれのふかとてのむよれとせんとせん
 たぢなみはせよせよせよせよせよせよせよ
 あねれのひまも有あと吹風ひのうけの背
 えのちのちののぬめ黒くまの風車乃せよ
 狂言えれとぞとぞとぞとぞとぞとぞ
 あめのせひえれせひえれせひえれせひ
 ちりとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ
 ありのうめとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ
 まよもの庭堂あを縁をひくとぞ

ほの涼すよれ泥と生人かくわう時
 カ下下生なりのと
 特やると西へあらのとアラホのとアラホ

此六家拔萃一冊者先年書寫
之本去歲罹火裁燒失畢故寓
蜂岡寺而再寫得之者也

延寶第二甲寅曆季夏上二寫

昌純





